

(千葉県)

自立・挑戦をテーマに挑む 海浜田園都市の地域創生戦略

自然・食・ゆつたりとした住み良さ

東京都心部からは75km圏内、県都・千葉市からは45km圏内の通勤圏。特急わかしおを利用すれば東京駅と約70分、圏央道や九十九里有料道路など陸路を使えば東京・横浜方面と約80分で結ばれる、外房東南部の海浜田園都市いすみ市は、平成17年12月5日、旧夷隅郡夷隅町、大原町、岬町の3町合併により誕生した。

市制施行10周年の記念日となった昨年（平成27年）12月5日および翌6日には、合併後の新生・いすみ市の名称をいち早く全国に広めることに貢献してきた恒例の「第8回いすみ健康マラソン」が、いすみ市の市制10周年記念行事の一環として開催された。

いすみ健康マラソンは合併3年目の平成20年に第1回目が開催された。以後、第1回〜7回まで7年連続で、全国に2000近くあ

るとされる一般のマラソン関連イベントの中から、参加者の評価をもとに決定される「全国ランニング大会100選」（一般財団法人アールビーズスポーツ財団主催、雑誌『ランナイズ』発表）に入選し続けてきた人気のマラソン大会だ。

ちなみに、市制10周年記念の第8回いすみ健康マラソンも、平成27年12月に全国で開催されたハーフマラソンの大会のうち、総合的な魅力度が満点に近い形で1位にランキングされている。

この大会はいすみ市出身のスポーツジャーナリストで、ロサンゼルス五輪（84年）の女子マラソン日本代表選手だった増田明美氏の冠大会（増田明美杯）としても知られる。市制10周年記念日当日の12月5日に行われた第8回大会の開会式において、いすみ市は増田氏に「いすみ大使」（2人目）を改めて委嘱。全国からいすみ市を訪れていた4613名の参加者（ランニング愛好者）たちから、盛大な拍手を

贈られた。

そして新しいすみ大使の委嘱を受けた増

田氏は、「マラソンを通じて、ふるさと・いすみ市の自然、食、ゆつたりとした住みやすい環境を内外に発信していきたい」（12月6日付け毎日新聞千葉県版より）とスピーチした。増田氏のこの簡潔な言葉には、まさにいすみ市の地域特性の粹とともに、いすみ市が現在行おうとしている地域創生の要諦（根幹）が凝縮され、明確に示されているといえる。

「いすみ市の地域創生に向ける基本姿勢は



おおた ひろし
太田 洋
いすみ市長



眼下に大原漁港を見下ろす名勝・八幡岬

自立と挑戦です。折しも合併特例が終了する時期を迎えて、平成27年度の予算編成では思い切った事業の見直しを行いました。そして平成28年度から本格的に、いすみ市の地域特性を生かしながら多角的に地域創生を実施していくけるよう、選択と集中の行政運営を基本とする方針へ、大きく舵を切ることになりました」

そう語るのは太田洋・いすみ市長である。太田市長のいう「いすみ市の地域特性」は、



品質高い米を産出するいすみ市の典型的な田園風景

追々ご紹介していくが、実に多岐に渡っている。とりわけ豊かな自然、歴史的に程よく手入れされてきた里山と里海、そこから産出される多彩な食材、そうした諸要素が一体となって形成される暮らしやすさは、まさに現在のいすみ市が誇るべき最大のアピールポイントなのだ。同時にこうした良質な住環境は「ないものねだりはせず、地に足をつけて、今ある地域資源を活用しながら魅力ある地域づくりをしよう」（太田市長）という基本姿勢の下に策定した、いすみ市『地方創生総合戦略』に不可欠な推進力ともなっている。

『地方創生総合戦略』の目標は、「①地域経



日本有数の水揚げ量を誇るイセエビは、タコやアワビなどとともにいすみブランドの代表格(大原漁港)



済循環を拡大しての雇用の創出」「②地域資源の価値を再認識しての地域所得の向上」「③都市通勤圏にある自然豊かな地域性を生かしての人口減対策」

④豊かな自然環境、子育て支



江戸時代から続く勇壮豪快な「大原はだか祭り」には市内18の神社から神輿が大集合（毎年9月23・24日）

援の充実を発信しての地域の魅力の向上」の4項目に集約される。さらに人口減少化対策に不可欠な「子育て支援や教育の充実化」、財政健全化の鍵の一つである医療費削減に直結する健康づくりなど「市民福祉の向上」が加わる。

地に足のついた、 いすみ市らしさを追求

平成17年12月5日の合併時に4万3594人だったいすみ市の人口は、10年後の平成27年4月に4万365人へと3000人強減少

している。転出する人々は10代後半〜20代前半の若年世代が中心で、その最大要因は雇用の場の減少だ。

「一番大きいのはいすみ市に隣接し、かつて日立製作所の企業城下町といわれるほど大規模なモノづくりの伝統と市場を形成してきた茂原市や、千葉市から先の内房側に展開する千葉工業地帯での雇用の場が急速に減りつつあることです」（太田市長）

企業の撤退や工場関係の自動化推進などの諸要因により、以前からいすみ市に住み、そうした企業に通勤していた働き盛り世代のほか、就職先を求める学卒直後の世代などが、雇用の場を求め転出していく事例が最も多いという。

その一方、この10年間で1000名近くの転入者があったことも見逃せない。いすみ市は「田舎暮らしの本」など移住情報関連の各メディアが選出する「移住してみたい地域ランキング」の常連である。漁業・農業などへの就労希望者だけでなく、豊かな酪農環境を生かしたチーズ工房づくり、多彩な食材を扱う飲食店の起業、サーフィンなど趣味中心の生活を満喫するための移住、隣接する茂原市や千葉市、東京都心部などへの通勤を前提とするベッドタウンとしての需要など、タイプも年齢層もさまざまな移住者たちがやってくる。いわば「自己実現」を目的にいすみ市に転入してくる人たちが多いのである。近年のいすみ市の転出・転入事情にはこうした対照的



戦国時代に築かれた万木城跡はツツジや桜の名所

な事情が見られるのである。

基幹産業である漁業や農業は質の高い産物を産み出して安定した存在感を発揮している（後継者不足という問題は抱えているが）とはいえ、少なくとも現時点では、いすみ市の人口減少を抑制するほど雇用の場としてのパイに余裕はない。

となれば企業誘致など、雇用の場の確保を応急処置的にでも考えたいところだが、いすみ市ではそうした考え方を持っていないようだ。

一つには「さまざまな条件を考えて、もはや企業誘致がそう簡単にできる時代ではないという見極め」（太田市長）がいすみ市にはあ



太東ビーチパーク、三軒屋海岸での恒例行事「サーフタウンフェスタ」

木原線を第三セクター化して誕生したいすみ鉄道（いすみ市のほか、千葉県、大多喜町、小湊鉄道などが共同出資）は、乗車運賃の売り上げ以外に収入源がほとんどなく、営業基盤がもともと脆弱だった。平成19年には再び廃止案が



大原～上総中野(大多喜町)を結ぶ人気のローカル線・いすみ鉄道

る。進出を希望する企業があったとしても、少なくない数の移住希望者たちがその理由にあげる豊かな自然環境などの「いすみ市らしさ」を損なわないようにしたい。クリーンで、いすみ市らしさに合致するような企業の進出があればそれは嬉しいが、そうした僥倖（たより）をいわずに待つよりは「今ある地域特性に磨きをかけてフル活用しよう」というのが、前述したいすみ市『地方創生総合戦略』の基本理念なのだ。

ここで想起されてくるのが、いすみ市も共同出資者でその存続に力を入れている第三セクター「いすみ鉄道」が次々と打ち出している、再生のための基本理念および数々の活性化戦略である。

地域資源の力が活性化の力

いすみ鉄道はいすみ市の大原駅と内陸の上総中野駅（夷隅郡大多喜町）を結ぶ路線総距離26・8km、全14駅の非電化単線のローカル線だ。夷隅川流域に展開する美しい里山風景の中を走る（約50分間）ことなどで、近年、人気が高まっている。終点の上総中野駅では内房側の五井駅（市原市）までを結ぶもう一つのローカル線・小湊鉄道に連絡しており、両者乗り継ぐと約2時間で房総半島を縦断することができる。バス会社などグループ会社が多い私鉄ローカル線・小湊鉄道と違い、昭和63年の国鉄民営化に伴い廃止寸前の旧国鉄・

出るなど、再生は難しいかと思われたが、ここで思い切った手を打つ。外部からアイデアと実行力の豊富な社長を公募し、運営方針の抜本的な革新を目指したのだ。

就任した新社長（鳥塚亮氏）は英国航空など複数の外国航空会社勤務を経験してきた人材で、運転士公募で話題を呼び、多種多品目のオリジナルグッズや土産物の開発、アニメ「ムーミン」のキャラクターを採用したムーミン列車の運行やユニークな企画旅行列車などのヒット企画を次々に連発して、いすみ鉄道の存在を全国発信、そのネームバリューはいちやく全国区レベルに拡大した。

それが奏功していすみ鉄道を利用する観光客は目に見えて増えた。しかし運行本数が少

なく、地域の利用が朝夕の通学客（沿線の中
高生）と高齢者が中心のため、乗車運賃だけ
では赤字を解消するほどには至らない。その
分を豊富なオリジナルグッズなどの物販や、
ムーミンを活用したブランド化や企画旅行列
車などの観光客誘致などによって補ってい
る。そして注目されるのは、いすみ鉄道によ
るこれらの斬新な企画の実行部隊のほとんど
が、小中高生から高齢者に至るまでの沿線住
民や、全国のいすみ鉄道ファンのボランティ
アでまかなわれていることだ。いすみ鉄道は
言わば、地域を巻き込む形で、企業と行政、
市民（外部ファンも含め）との協働の精神によ
り再生したのだといえる。

いすみ鉄道のこの事例はいすみ市『地方創
生総合戦略』の基本理念、「ないものねだりを
せずに今ある地域資源、地域の魅力を磨いて
移住・定住者や交流人口を増やすことなど」
より、地道に地場産業の振興をはじめとする
地域活性化を実現するとともに、人口減少を
抑制していこうとする姿勢」（太田市長）と、
非常に共通点が多い。

多様多彩ないすみ市の地域特性

今回実際に取材させていただいた事例を中
心に、いすみ市の地域特性（魅力）を見てい
こう。いすみ市の自然環境の豊かさを象徴する
事例として、まず国の天然記念物第1号に指
定（大正9年）された太東海浜植物群落（開花



葛飾北斎「神奈川沖浪裏」の原景との説のある《波の伊八》の欄間彫刻「波に宝珠」（行元寺）



大正9年に国の天然記念物第1号に指定された太東海浜植物群落

期は7月前後）がある。また植物群落の近く
には、全国のサーファーにとつての憧れの海
であり、その存在を目当てに移住する人も少
なくない太東ビーチパークや三軒屋海岸があ
る。いすみ市に外部から訪れるサーファーは
年間数十万人単位で安定しており、市内には
サーフィン関連の業者が構成する「いすみ市
サーフィン業組合」が組織されているほどだ。
「いすみ市は現在、隣接する一宮町と連携し
て、2020年東京オリンピックの追加競技
の有力候補サーフィンの会場誘致活動を実施
中」（太田市長）であり、それが実現すれば
サーフィンのメッカいすみ市は世界に発信さ

れることになる。

サーファーや海水浴客に愛されるいすみ市
の海は、アカウミガメの産卵が毎年見られる
癒しの海でもある。またイセエビやアワビ、
サザエ、タコなどいすみブランドを形成する
質の高い魚介は、流域の里山風景の源泉とも
いえる夷隅川が河口に運んでくる山里の養分
をたっぷり含んだ海にはぐくまれている。

これらの魚介の魅力は現在、3年前から大
原漁港で毎週日曜日に開催されている「港の
朝市」などを通じて積極的に発信されている。
夷隅川自体も長良川に次ぐ全国第2位の魚種
（72種）が棲息しており、中でも国の天然記念



豊富な魚介で知られる大原漁港「港の朝市」(毎週日曜開催)



平成7年に設置された「千葉県いすみ環境と文化のさと」では絶滅危惧種ミヤコタナゴを飼育



いすみ市産の米と食材8種を配した「波の伊八めし」

物および絶滅危惧種に指定されているミヤコタナゴの存在は有名だ。

いすみ市が仕掛け、昨年11月放映の人氣テレビドラマ『孤独のグルメ』で紹介された大原駅前の源氏食堂(いすみ豚を使った各種の豚肉料理)や、「波の伊八めし」(江戸時代の欄間職人で波の造形で並ぶ者のないとされた伊八にちなんだ料理。地元産の食材8種以上といすみ米を使用)が代表する多彩な海の幸・山の幸を扱う店舗群。さらには各種コンテストで受賞が続き、日本航空の国際線ファーストクラスでも採用されるなど、いすみ市は隠れたチーズの名産地でもある(移住者を中心に運営されるチーズ工房は現在5カ所)。

いすみ市の地域特性に根差した魅力のポイントを挙げていけばキリがない。またこれまでご紹介してきたように、いすみ市は地域創生に関して、自然体の姿勢ばかりでなく、かなりの攻めの姿勢も、要所では打ち出している。例えば『地方創生総合戦略』の策定以前(平成23年)からの取り組みだが、医療費削減に向けた取り組みにおいても、いすみ市は既に目覚ましい成果を挙げた。

「糖尿病が重症化した合併症の対策事業に医師会との連携で積極的な発信活動に取り組み、医療費が莫大にかかる人工透析の患者数を激減」(太田市長)させ、昨年9月には日本ヘルスサポート学会賞を受賞している。

また「近い将来の圏央道の全通を見越し、神奈川県観光協会といち早く協力体制を締結」(太田市長)した事例、平成27年度からいすみ市への転入者に対する東京方面への「特急料金券購入補助金制度」を開始した事例なども、いすみ市の積極的な取り組みのひとつだ。

このように自らの立ち位置を決して見失うことなく、多彩な魅力をさらに地道な努力で磨き上げながらも、勝負所では「選択と集中」の精神で物心を大胆に投入していくいすみ市の地域創生力には、小粒でも大きな存在感を放つ山椒のような、鋭い隠し味がそこここに感じられる。

(取材・文 遠藤 隆 / 取材日 平成28年2月5日)